

ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考える

## ふるさと「風」

第十四号（二〇〇七年七月）

遠のいた時代

打田昇三

東大俳句会からホトトギス派を経て「万緑」を主催した中村草田男の句に「降る雪や明治は遠くなりけり」というのがある。今は明治どころか大正も昭和も遠くなり歳月が猛スピードで駆け抜けた後に全く違う世界が出現するような時代で、いわゆる高齢者は口をポカンと開け、目を白黒させているしかない。

「降る雪や…」が作られたのは昭和6年であるが、その前に別な人が詠んだ「獺祭忌（だつさいき）明治は遠くなりけり」という作があるそう、句の優先性が問題にされたことがあるとか、しかし、素人が見ても「獺祭忌…」という限定された言葉よりも「降る雪や…」のほうが時代を幅広く表現していることがわかる。だからこそ、「この句が有名になったのである」。平成も19年になると「降る雪や昨日が遠くなりけり」と嘆きながら暗い空を見上げている孤独な老人があちこちに居る。

「獺祭忌」は現代俳句を創始した正岡子規の命日（明治35年9月19日）のことで、「糸瓜忌（へちまぎ）」とも言われる。子規は自分の雅号を「獺祭書屋主人」などと称していて「茶器どもを獺（おそ）の祭の並べ方」という句も作

っている。別に獺（かわうそ）が好きだったわけでもなからうが、野性動物の出現するような自然を愛でていたのである。獺は変な癖があつて、捕ってきた獲物（魚）を川岸に並べて置くのだから、その様子がまるで祖先にお供え物をするように見えたところから「獺魚を祭る」といつて節氣の言葉にもあり、俳句の季語にもなっている。今は獺など見たくても見られない。「かわうそ」は居ないが、そのかわり政治家、事業家、官僚から、大切な仕事や聖職と呼ばれた職にある者まで「うそつき」が横行していて善良な国民を欺き苦しませる。

中村草田男は明治時代を俳句革新時代として捉え、江戸期に沈滞し邪道化した俳句を短歌と同等の文学的地位に引き上げた正岡子規の功績を昭和前期に記録しているが、現代では「子規こそが現代日本語を生み出した人物」として再評価されている。つまり、私たちが何気なく書いている近代日本語を確立させた人物なのである。

尤も近頃は文章を書かずに携帯電話やパソコンでメール発信をするので、絵文字やら意味不明の言葉が横行しているらしく、「日本の国語が遠くなりけり」である。

草創期の東大に進んで政治家を目指した子規

は、明治21年の夏休みに鎌倉へ出かけて血を吐いた。そこで口の周りが赤いホトトギスの句をつくり、この鳥の名である「子規」を名乗るようになった。明らかに結核の兆候であるから、すぐ休養すればよいのにに学生生活を続け、それどころか明治22年の春休みには本郷の下宿から友人と二人で水戸を目指して歩いた。水戸線は開通していたが常磐線は未だ無い。同級生で親友の菊地謙二郎を訪ねる旅だったが行き違いで本人には会えなかった。このいきさつは子規本人が「水戸紀行」として記録し、常陽芸文に特集されている。旅の途中で石岡にも子規が一泊して、「二日路は筑波にそふて日ぞ長き」の句を詠んだという。

菊地謙二郎は石岡（府中）藩士の家に生まれた。藩士といつても、菊地家は水戸藩から支藩である府中藩に付家老として遣わされた重職らしい。水戸本藩の付家老は中山家で松岡藩（高萩）一万五千石から二万五千石の大名だったから、支藩二万石の付家老とはいえ一般の藩士とは別格だったろう。明治維新までは江戸詰めの手である。

正岡子規は哲学科から国文学科に替わり、なおかつ東大を中退して野球、文学、俳句に熱中したらしいが、菊地謙二郎は東大国史学科第一回卒業生として各地の有名校に教鞭をとり、乞われて郷里・水戸の中学校（現・水戸一高）校長となった。

この人は明治40年に一カ年の海外視察をして自由主義を知り、生徒の自主性を強調する教

育方針を打ち出した。学校新聞、運動会、修学旅行、スポーツ競技会、生徒会など、現代ならばごく当たり前のことを実施させた。折しも大正デモクラシーと言われた時代、大正8年に菊地校長は再度欧米の中等教育を視察して帰国し、講義中心の教育から学生が自発的にする学習、定期試験廃止（学習状態の評価）など斬新な改革を提唱した。今ならば民主主義教育の実践者などと騒がれてマスコミの寵児となるのだろうが時代が悪い。デモクラシーの反面、特高警察の設置、思想弾圧など国民が袋小路に追い込まれる最初の段階であり、神様の親戚みたいな人たちが居たり、県議会までが政党のイデオロギ―に左右されて事の真実が見極められない。「欧米か！」と突っ込むお笑い芸人がいたが、超先進的な菊地校長の言動が問題にされた。

右翼などの圧力に屈した県知事が校長に辞職を迫り、「危険な思想家」として大正10年紀元節の翌日に菊地校長は水戸中学を追われた。これに対し生徒たちは「恩師を救おう」と闘争委員を選び八百人の血判状を揃えて「菊地先生復職祈誓同盟会」を結成、2月14日から同盟休校に入り、市内をデモ行進して知事に抗議した。全生徒が退学届を出し、一部、投石事件などもあって大騒ぎとなった。菊地校長は生徒を集め「諸君の気持ちは有り難いが、学生の本分は学問にあり…」と説得し、事態は収束した。翌日のある新聞は「言論弾圧、文部省の無定見…」を報じたという。

水戸中学校の事件に影響されて各地の学校で

は「児童生徒の個性を尊重する教育」が重視されるようになったが、県知事が自由主義を嫌ったそう、茨城県は国家主義とも同調して「右翼の本場」と化すことになる。昭和の初期、全国的な不景気で県内の農村が疲弊し小作農民が貧困に喘いでいた時期に「赤い教育」を行ったとして多数の教職員が治安維持法で検挙された。その一方で血盟団事件、五・一五事件などは土浦の海軍軍人と水戸（大洗）の右翼が協調して行ったテロで「やはり水戸浪士の伝統を受け継ぐ右翼発祥の地」などと他県から皮肉を言われたそうである。

正岡子規と菊地謙二郎は親友だったが、子規は夏目漱石とも同期であり終生の友なので、漱石は菊地謙二郎とも交友があったと思われる。石岡出身と言えなくも無い菊地謙二郎の名は現代では余り知られていない。東大の前身である旧制一高本科で国史学科を専攻したから教師の道を選んだのである。英文科の漱石も「坊ちゃん」で知られるように教師から出発した。子規は政治家希望だったから哲学を選び途中で森鷗外がドイツ留学から持ち帰った「ハルトマンの美学」という、後に慶応文学の原点となる学問に傾倒して文学青年に変わった。菊地謙二郎が教師にならずに子規や漱石らと同じ活動をしていたら、先駆的な人物だったのに、「校長追放」などという屈辱的なことで挫折する運命から逃れられたかも知れないと思ったりもする。

明治維新は二百六十余年に亘った徳川幕府の支配から脱却して日本が生まれ変わったことに

なるのだが、実際は野心家の下級公家・岩倉具視が黒幕で薩摩、長州、土佐などの下級武士が藩主を担いで起こしたクーデターだから陰謀の疑いもある。全ての面で変えていかなければならないところ、名ばかりの政府では国家としての体裁を整え自分たちの権力を維持するのに一杯でとても文化の面までは手が回らない。松山出身の正岡子規にしても、尾張出身の二葉亭四迷や坪内逍遙にしても近代文学を創りあげた人物は皮肉にも明治維新で賊軍とされた藩の出身者たちである。明治18年に日本で最初に国際的な小説「佳人の奇遇」を著わした東海散士こと柴四郎などは最後まで官軍に苛めぬかれた会津藩の武士だった。

ところで本藩の水戸が勤皇派、佐幕派に分かれて最後まで骨肉の死闘を繰り返した関係で石岡に居た府中藩も明治維新では藩論が分かれたようだが、藩主が徳川の一族なのだから基本的には賊軍の体質である。幕末に起こった天狗党事件のときも当然ながら鎮圧の兵を出させられている。水戸藩主の徳川慶篤は尊王攘夷の親玉だった徳川斉昭の息子だから攘夷の旗を揚げた天狗党に理解を示したけれども、家臣が攘夷派と佐幕派に分かれて争っているので身動きが取れない。天狗党の意に添うように、攘夷の一環として開港中の横浜港を閉鎖して外国嫌いの孝明天皇に喜んで貰うことを思いついた。早速、幕府に申し出て支藩の宍戸（笠間）藩主と府中（石岡）藩主と付家老の松岡（高萩）藩主を呼び寄せたところ、三人とも仮病を使って出てこ

なかつた。また府中藩主に水戸藩の内部抗争が武力対決に発展しないように鎮撫させた。これも効果を得られる筈もなく、天狗党は再び筑波山に拠点を移した。

鳥取三十一万五千石の藩主で庶流ながら水戸徳川家の血筋を引く池田慶徳は、天狗党などの勢力を攘夷の先鋒とすることを提案したのだが、肝心の水戸藩では佐幕（保守）派の勢力が強くなつて攘夷派の志士たちは弾圧されることになる。その後も府中藩では幕府側が繰り出した天狗党討伐の軍勢に参加することになり、明治維新の賊軍に分類されそうになった。いち早く恭順の意を表したので指定だけは免れたものの、その代わりに対立抗争が収まらない水戸藩を新政府が見限り茨城県を「三等県」に指定したから「賊軍」並みの立場になつてしまった。結果的には明治維新に乗り遅れた石岡ではあつたが、賊軍とされた他の藩と同じように文化面では明治新政府を見返すようなことがある。正岡子規が菊地謙二郎を訪ねる旅で石岡に泊まつた年の秋、石岡小学校内に「石岡書籍（しょじやく）館」という県内初の図書館が誕生した。初代の館長に就任した石岡小学校長の手塚正太郎が中心となつて設立されたらしい。この人も立場上では賊軍並みの府中藩出身である。明治二十二年の二月十一日には憲法が發布され、日本は近代国家として歩み始めたのだが当時は未だ図書館の概念が国民に知れ渡つておらず、僅かに東京と京都に「書籍館」が置かれただけで「図書館令」が出るのは十年も後のことになる。

つまり石岡図書館は茨城県最古というより日本でも屈指の歴史を持つているのだが、石岡市史の年表に簡単にしか記録されていないのは官軍に遠慮したのだろうか。

さて話を正岡子規に戻して夏目漱石や菊地謙二郎らの他に子規の友人とされる人物に秋山真之がいる。日本海海戦で連合艦隊先任参謀として作戦を立てロシアのバルチック艦隊を撃滅させた人物である。子規は自分を含めて菊地謙二郎、秋山真之など七人の仲間を「七変人」と呼んでいたらしい。秋山真之は兄から学費の援助を受けていた。その兄が日本の騎兵を育成し世界最強のコサック騎兵と渡り合つて日本軍の窮地を救つた秋山好古である。近い将来に司馬遼太郎先生の「坂の上の雲」がドラマ化されると聞いたが、この物語は秋山兄弟と子規を軸に日露戦争を克明に描いている。

子規と同じ賊軍の松山藩下級武士の子として生まれた秋山真之は文学を志しながら兄に薦められて軍人となり、兄の好古は貧乏から抜け出して勉学に励みたい一心で師範学校を出て給料の良い教員となつた。そこで教育界でも明治維新の「官軍」として幅を利かす薩摩、長州などの出身者に憤慨する同郷の先輩教師から、賊軍の意地を見せるために軍人になるようお膳立てをされ陸軍士官学校を受験した。文学者や教育者になる筈の秋山兄弟が、下級武士出身だったために、図らずも軍人の道を進み、結果としてこの二人の兄弟が明治の軍隊に居たお蔭で日本は日露戦争に勝利することが出来た。「坂の上

の雲」が書かれるまで彼らは一般的には無名であつた。

秋山真之が作戦を立てた日本海海戦で日本海軍は十九隻の敵艦を沈め、五隻を捕獲し、二隻の病院船を抑留したほか、中立国の港に逃げ込んだ巡洋艦、駆逐艦、特務艦の六隻を武装解除した。日本艦隊の損害は水雷艇三隻だけで、世界一の海軍を壊滅させたことは世界各国を驚かせた。水雷艇は、軍艦とは呼ばれない海軍の底辺のような実にお粗末で小さな船だつたそうで、それが命がけで敵艦に接近して魚雷を発射するので犠牲も多い。一番に活躍した名もない軍艦だつた。昔も今も底辺で働く人たちが社会を支えているのだが、そこに陽が当たるとは、ない、

ロシア艦隊の巡洋艦と駆逐艦各一隻は戦場から逃れたが途中で座礁沈没し、巡洋艦一隻と駆逐艦一隻がウラジオストク港に帰投し、特務艦一隻が本国に辿りついた。武装解除された六隻のうち、六千屯の巡洋艦「オーロラ号」が今でもロシア海軍省のあるサンクトペテルブルク市で、バルト海に注ぐネバ川に繋留され海軍中央博物館の分館になつている。横須賀の三笠のように勿論、レプリカであるが、オーロラ号はロシア革命の際に一斉蜂起の合図（号砲）を鳴らした。ロシアが明治維新の諸藩と同じように「日本の海軍の恨み」を忘れないためにオーロラ号を置いたとしたら要注意である。

今では遠くなつた明治時代も、新生日本として全てを変えたのであり四十五年間を顧みれば

重要な出来事が山ほどある。東京遷都に始まり、版籍奉還（廃藩置県）から鉄道及び通信の開通、郵便制度、教育令、市町村制、地租（税制）改正、徴兵令と常備兵制、そして帝国憲法発布、国会開設などなど大きなことが続くが、特記すべきことは戦争（争乱）の多さである。もとより徳川幕府を倒して新政府が出来たのだから旧勢力の抵抗は予測されるが、それは明治元年（一八六八）正月早々に起こった鳥羽伏見の戦いから上野戦争、北越・会津戦争そして翌年5月に函館五稜郭が陥落して終る戊辰の役（ぼしんのえき）戦争開始が明治元年戊辰の年）で幕を閉じた。これは、第十五代将軍となった水戸出身の一橋慶喜が「大政奉還」というフェイントをかけて官軍が武力行使する機会を奪ってしまつたため、西郷隆盛らが謀略を用いて旧幕臣たちを挑発した結果、起こるべくして起こつた戦争である。その報いなのかどうか、西郷隆盛は明治6年に新政府に失望して官を辞し、郷里の鹿児島に隠退してしまう。その影響だろうと思われるが、日本各地で新政府に対する抵抗運動が起こっている。

悪い例えで恐縮だが、自家用車の普及などで乗客が減り鹿島鉄道が廃止されたように、尊王攘夷・倒幕の嵐が収まった後、山口では藩の軍隊として組織した奇兵隊ほか数個の部隊が不要となり解散させられた。これに抵抗した暴動が鎮圧されたのを手始めに、九州農民の反乱、長野における信濃川改修工事反対の暴動などがあり、明治6年には大分、岡山、福岡、鳥取、香

川、長崎などで旧体制（徳川時代）を望み明治新体制に反対する暴動などが発生した。熊本では「敬神党」と称する極右思想の二百名ほどが鎮台（軍）を襲つて司令官を殺害する「神風連（じんぷうれん）の乱」があり、これに呼応して秋月藩（福岡の支藩・甘木市）でも二百余名が蜂起した。

そして前兵部大輔（さきのひょうぶたいふ）という新政府で前国防次官だつた前原一誠が自ら山口県庁を襲つ「萩の乱」やら、前司法大臣だつた江藤新平が一万人の暴徒を率いて法を犯す手本を示すなど、現代と同様に地位や身分が上だからといって信用が出来ない時代になつたのである。その根底には威張つていた武士が刀を差せなくなつたり、新政府で良い役職に就けなかつたりの不満もあつたようである。結果として明治10年に西郷隆盛が周囲に推されて立ち上がり西南戦争が起こるのである。さらに西南戦争の後には、事も有るうに東京のご真ん中、竹橋にあつた近衛の連隊で論功行賞に不満を持つた士官、下士官、兵士二百余人が暴動を起こしている。

西南戦争は2月15日に始まり9月24日に終つたが、一万三千の薩摩軍は勇猛で、戦死者五千人の他は全員が負傷するまで戦つた。これに対して政府軍は長州の山県有朋が指揮を執り、新制度の下に編成した軍隊の五万四千余を派遣した。このうち戦死六千八百余、負傷者九千二百余で最初は勝てなかつた。白兵戦に備えて新撰旅団として警視庁の巡査隊を投入し田原坂の

血戦などで活路を開いたのである。皮肉なことに当時の巡査は明治維新で賊軍とされた藩の出身者が多かったから、文学同様に新政府を作り出した諸藩は、賊軍として軽蔑した藩に救われたことになる。

石岡市史には西南戦争以降の戦没者が記録されている。それによれば明治10年10月に一人が従軍凱旋途中で亡くなつていますが、階級欄が空白だから警視庁巡査隊で参加された方であろうと推定している。明治27年から36年にかけては七名のお名前があり、場所が清国、満州、台湾と病院船内とあるから、台湾出兵と日清戦争と引き続く中国駐留中に戦没されたのであろうか。

日清戦争・日露戦争がどうして起こつたのかは靖国神社の諸問題に似ていて、その立場で全く意見が変わるだろうが「日本の危機を回避するためだつた」とは言つても戦争の起こつた場所が自分の国ではなかつたのだから今の憲法の本旨からすれば苦しい。それもあつて、憲法を早く改正したい人がいるのかも知れないが：

明治四年に五十四人の沖縄島民が台湾で現地人に虐殺される事件が起こり、明治6年には岡山の漁師が略奪を受けた。どちらも出漁中に台湾へ寄つて襲われたのであり日本政府は当時、台湾を属領としていた清国（中国）に対し嚴重抗議をしたのだが清国側は「台湾は我が領土ではない」と突っぱねてきた。日本政府は「それならば」と西郷隆盛の弟で西南戦争には兄に従わなかつた陸軍中将の西郷従道（さいこうつ

ぐみち)を司令官として九州の兵三千六百を派遣し台湾征伐を行った。台湾は、近松門左衛門の歌舞伎などで「国性爺(こくせんや)合戦」として知られるように明(みん)の遺臣・鄭成功(ていせいこう)が根拠地としていて、彼の死後は清国に服属していたのだから、早い時期に日本側に賠償しておけば安上がりで済んだのだが、つまらないところで惚けたため、巨額の賠償金を日本に払わされた。当然ながら日本が憎い。

そもそも明治維新の新政府は周辺諸国に使者を派遣して政権が交替したことを告げ外交関係を保とうとしたのだが、韓国だけは鎖国政策をとって取り付く島もない。実は徳川時代には対馬の大名・宗氏(そうし)を通じて日本と韓国の交渉があり徳川慶喜が將軍になったとき、フランスの軍艦が朝鮮半島で砲撃事件を起こしたので韓国から相談を受けていた。慶喜は「日本のように一部の港を開放して貿易をするように」アドバイスをしていた。ところが当時の外国奉行が野心の多い男で、將軍(慶喜)の意思に反して「韓国が日本の助言を聞かなければ武力で攻める」という悪巧みを計画した。これが洩れたから韓国では日本を警戒していた。そのうちに政権交代で明治新政府が外交交渉に行ったので韓国が「どうぞ宜しく」とは言わない。

そのような状況下で明治八年九月に日本の軍艦で雲揚号というのが対馬海峡、黄海近辺の水路測量をして、飲料水補給のために江華湾に入

った。現在の韓国の首都ソウルから東へ数十キロ離れた場所である。これに対し韓国は無断侵入と判断し砲撃を加えてきた。しかし砲撃とは名ばかりで弾丸は目標まで届かなかった。雲揚号は待ってましたとお返しに砲台を破壊し、軍艦数隻で全権大使がやってきて強引に「日韓修好条約」を結ばせた。韓国は既に清国(中国)と親分子分の盃を交わしていたから清国が日韓接近を祝福する訳がない。不安定な韓国政情を巧みに利用して日本の影響力を抑えようとした。

明治十五年にはソウルの日本公使館が襲撃され、二年後には再度、暴動が発生して、この時には遂に日本軍と清国軍とが戦い、小勢の日本軍は退いている。さらにはフランス、ドイツ、ロシアなどの強国が中国大陸に野心を向けてきたから日本も「富国強兵」で国力を整え大陸に進出することになるのである。

日清戦争は日本軍が始めて経験する大國との戦争だったが、発端が韓国内乱の鎮圧を口実に清国が朝鮮半島に兵を出したことへの対抗で

## 石岡市柴間 ギター文化館発 ことば座「常世の国の恋物語百」第三回公演

### 演

#### = 常世の里うた特集 =

第五話「漆黒と雑木林と星たち」

第六話「風に戯れて恋歌の呟いて」

万葉集より「ひたち恋歌」

2007年7月15日(日曜日)

= 13:30 開場 14:00 開演 =

(料金: 前売券 2500円 当日券 3000円)

ことば座第3回公演は、「常世の里うた」と題して、詩物語を特集いたします。舞姫・小林幸枝の恋歌朗読舞の魅力をお楽しみいただきたいと思います。

小林幸枝が自らの詠んだ歌に舞を舞い、近藤治平がふるさとの風への恋心を一行の呟きに歌います。

ふるさと風の会の兼平ちえこが挑戦する、常世の国の暮らしの顔五百、色に刷いたふるさとの風舞を背景に常世の里の恋歌を、小林幸枝ならではのスケール感で切なく、美しく舞います。

前売券はギター文化館(0299-46-2457) 石岡市中町商店街カフェ・キーボー(0299-23-1100) ことば座事務局FAX(0299-23-0150)にて受け付けております。

あり日本軍は先ず広島島の師団から七千人ほどの陸軍と軍艦九隻を仁川に送って機先を制した。両国が宣戦布告したのは明治二十七年八月一日ながら六月初め頃から喧嘩は始まっており、七月二十一日には仁川沖（豊島沖）の海戦で中国大陸から派遣されてきた兵員を満載した清国海軍を叩いて大損害を与えたから、一部戦場を除き日本の有利に展開したようだ。

日露戦争は日本が戦争などするだけの経済的余裕がないままに始めたので、最後の頃には前線の救援要請に応えられる兵員も機材も無かったといわれる。当然に戦場では苦勞をされた訳で、明治三十七年二月六日にロシア駐在の公使が最後通牒をロシア政府に渡してから明治二十八年九月一日に日露休戦協定が調印されるまでの間に旧石岡の戦没者は四十三名居られる。

戦争が終つてから病院で亡くなられた海軍の方四名も加えて日露戦争では四十七名が戦没されたことになる。一般に伝えられる二百三高地と近くの松樹山と、激戦地とされる場所です歩兵の方六名が戦死されたほか場所が病院となつていゝる十何名の方々も旅順攻撃で傷つき戦傷死されたのであろう。

この戦場ではロシア軍は山頂から機関銃を掃射して防衛し、日本軍は指揮官の乃木大将も機関銃を知らなかつたという。先に紹介した秋山好古は騎兵旅団長として別働隊を率いていたが、早くから機関銃の必要性を上層部に説いて秋山騎兵旅団だけが何丁かの機関銃を装備しており、そのために何度か強敵に遭遇しながら是

に耐えて奉天陥落まで縦横の活躍をしたということである。戦争が大和魂だけでは勝てないことはこの時に分かつていたのに昭和の指導者は明治の教訓を無視した。それだけでも神社に祀られる資格などはない。いつの時代でも組織の頂点にあつて人に命令する立場の者には先見の明を持つて余程しつかりして貰わなければ部下が犠牲になる。

日露戦争の戦没者四十七柱中で、明治三十七年6月15日、玄界灘で亡くなられた陸軍軍人十名の記録がある。これは「常陸丸事件」で犠牲になつた方である。常陸丸などと言っても今では高齢者以外は覚えてくれないとは思つが石岡以外の町村でも近年まで「先代（或いは先代）が常陸丸で戦死した」などという話を聞いたものである。

明治三十一年、長崎の三菱造船所で進水式をした一隻の大型船がある。先の日清戦争では大陸と周辺海域が戦場となり、その経験から海軍力と輸送力の増強が重視されて明治二十九年には「造船奨励法」が制定された。これによりわが国の造船工業は格段の進歩を遂げたと言われている。長崎で造られたのも、その国策に沿つて建造された六一七三トンの最新鋭大型貨客船であり、日本の造船技術を世界に誇示するものであつた。船の名前だが、その頃、水戸の出身で豪快に白星を重ねる一人の若手力士が居た。相撲の強さはもとより社会的な識見と手腕を持ち、遂に第十九代の横綱となり幕末から明治初期にかけて沈滞していた大相撲を興隆させた。

出羽の海部屋を起こし、後に両国に国技館が設置される基礎を築いて「明治の角聖」と称された人物がその人で常陸山谷右衛門と言つた。日本政府は最新鋭の大型貨客船を早々と政府御用船に指定し、その名称を付与するときに破竹の勢いで勝ち進む大相撲の常陸山を想起し「常陸丸」と命名したのであろう。常陸丸には多くの活躍が期待された。

常陸丸のことに触れる前に当時の日本海のことを述べておくと、日露戦争の開戦直前、つまりロシアとの関係が険悪化した時期に日本の指導者が先ず考えたことは如何にして日本海から朝鮮半島にかけての海上安全を確保するからであつた。ロシア海軍は旅順港に太平洋艦隊を集め、仁川とウラジオストクには戦艦や足の速い駆逐艦などを配備して日本の動きを牽制していた。その脅威を封じ込めなければ兵員、武器弾薬、軍需資材を戦線に送れず日本は手も足も出ない。幸いに冬のウラジオストクは凍つている。日本の連合艦隊は機を失せず旅順を攻撃して何隻かの巡洋艦、駆逐艦を破壊したのだが、多くのロシア艦は港湾内に避難してしまつた。

旅順港を見下ろす高台にはロシア陸軍の要塞があつて大砲が港を狙つている。そこで乃木大将の率いる第三軍（第一、第三、第十一の各師団など）が二百三高地攻略の至上命令を受け、粗末な武器を頼りに突撃を繰り返して大きな損害を被るのである。その一方で、港内のロシア艦隊を外に出さないように港の出口に老朽船を沈めて塞ぐことが一部海軍将校の間では計画さ

れていた。そして、今は歌う人もいないだろうが、「轟く砲音(つつおと)、飛び来る弾丸、荒波洗つデッキの上」行方の分らない部下の杉野兵曹長を探しに戻って壮絶な戦死を遂げた廣瀬中佐が軍歌で称えられ「軍神」と崇められる「旅順港閉塞作戦」が実施されることになった。

廣瀬中佐(戦死の時少佐)は、秋山真之の兵学校一期先輩で真之がアメリカに留学した頃にロシアに留学して将来を嘱望されていた。閉塞作戦を建築した一人らしいが、いわばエリートがなぜ危険な任務に従事したのか疑問だった。留学中に廣瀬大尉はロシア元帥の娘と大恋愛をして結婚まで考えたそうだが結果的には悲恋に終わったのだが敵將軍の娘との恋は軍人にとってマインスになるであろう。廣瀬中佐は独身で通したからロシア娘に惚れたらと思う。実は若い頃にエリートに相応しい縁談があった。このことを知っている者はごく僅かであるが、私は土浦で当事者の子孫から聞いたから本当のことである。海軍軍人としてはこれ以上は無いという良縁が持ち込まれ、勿論、廣瀬大尉は承諾したと思うのだが、相手のお嬢さんが平成娘のように現実的で「軍人なんかよりお金持ちのほうがいいわ!」と言ったかどうか、女性のほうから断られてしまったのである。エリート海軍士官は傷ついて独身を通したのだと考える。

話が逸れたけれども、明治三十七年春になると日本の連合艦隊に重大な情報飛び込んできた。極東の海軍が思うように動けないので、

ロシア海軍省は遠くバルト海にいる世界最強の艦隊をウラジオストクに回航させるといっているのである。一方、氷に閉ざされていたウラジオストク港も利用できるようになり、そこにじっと我慢していた装甲巡洋艦三隻を主体とするロシア艦隊が日本海に出没するようになった。

司令長官・東郷大将の元に編成された日本の連合艦隊は三つの艦隊と付属特務艦隊から成り、日本海の警備は初め片岡中将が率いる第三艦隊が担当していた。この艦隊は大型艦と水雷艇の攻撃タイプだったから、仁川、旅順に潜む敵艦攻撃とバルチック艦隊対策で、警備担当は途中から上村中将が率いる第二艦隊に替わった。第二艦隊には機動力のある駆逐艦が八隻あったのだが、上村中将はウラジオストクの敵主力艦に対抗する措置として装甲巡洋艦四隻に警備を担当させた。

一方、ウラジオストクの氷から解放されたロシア艦は数が少ないので日本艦隊との交戦を避けてゲリラ作戦に転じ、日本の商船を狙い始めた。四月二十五日には金州丸を襲い乗船中の兵士百名が犠牲になった。事件を知って日本艦隊は直ぐ追撃したがウラジオストクに逃げ込み、日本も海軍だけでは攻撃できずに海上警戒を続けていた。

それより先、日本海軍の最新鋭御用船・常陸丸は日本と大陸の間を往復し日露戦争の兵站を担うエースとして活躍していた。折しも大陸の戦線では日本陸軍が本格的進攻を目指して各地で激戦が展開されており、犠牲者も多く兵員資

材の補充が急がれていた。明治三十七年六月十四日、その日も常陸丸は将兵一九一六名と軍馬三二〇頭

その他の軍需資材を満載して宇品港(広島)を出港した。常陸丸の乗組員二二〇名中の船長、一等航海士、機関長の三名はイギリス人である。

六月十五日、玄界灘から対馬海峡にかけて海上は濃霧に覆われた。午前八時頃に遠くない海に砲声が聞こえた。これは僚船の和泉丸が攻撃されたものだが常陸丸は知るよしもない。間もなくロシア巡洋艦が現れ停船命令を発すると同時に砲撃を加えてきた。船長以下の乗組員は必死の操船で銃砲火から逃れようとしたが常陸丸に撃ち込まれた砲弾は百発以上、それでも世界に誇る名船は容易に沈まなかった。無念の犠牲者一九〇〇余は近衛後備連隊の招集兵であった。日本は開戦早々にして後備連隊まで前線に送らねばならなかったのである。常陸丸の乗組員二〇三六名のうち僅かに五十三人が漂流中に救助されたのみであった。金州丸、和泉丸、常陸丸いずれも護衛を受けることなく犠牲になった。日本海軍は翌年5月、バルチック艦隊を撃滅させて栄光を得たが、その陰に味方の船さえ護れなかった初歩的な不手際がある。

常陸丸事件で国民は第二艦隊の上村長官を怨んだというが、僅か四隻の軍艦で日本海の全域を守るものでもない。基本的な国家政策の欠陥としか言いようがない。明治時代を見ると、各界には優れた人物が現れて新時代に相応しい活躍をし、国家的にも明治天皇以下、政治、経

済、軍事、外交、文化、教育、医学、技術などの近代化に貢献しているが、国家として一つになつて動いたかと思えばそうでもない。明治維新の対立を引きずるようにバラバラで似たような方向に流れていたに過ぎない。

顧みて現代は「地域格差」に表現されるように勝者の論理に立ち政府機能や中央機構、首都だけが強化された社会である。暴動は未だ起きないが、どの地方も獺はともかく閑古鳥が鳴くような有様で国家として一つに纏まっているようにも思えない。国民が減んで政府だけが残るような政治は誰も望んではいないのである。地方を粗末にすれば都会志向の焦りから自然環境も破壊される。気象条件が変わつて、後の時代の人たちに「降る雪も無くて平成遠くなり」などと詠まれたりしないように、実際に明治維新を支えたのは、虐げられた賊軍出身者だったことを忘れては困る。

x x x  
お説びと訂正のお願い

ふるさと 風 第十三号(六月)6ページの3段目後から9行目「…猛将・井伊直政(信吉の舅)の指導のもと…」を削除して下さい。理由:徳川家康の五男・信吉と四男・忠吉とを混同したため、お説びします。

『水戸に来たのは五男・信吉で、その舅は、豊臣秀吉の正室・ねね(おね)の甥である木下勝俊(四男・忠吉の舅が井伊直政)、なお信吉の生母は、武田信玄の姉の子で信玄の娘を妻としていた穴山梅雪の養女とされているが、実は武

田家譜代の重臣・秋山越前守虎康の娘、秋山氏は足利の一族で本姓が一色氏ながら、信玄の命令で武田一門の秋山姓を名乗らされた。土浦藩主の土屋氏や金丸氏は同族である。信吉は武田家の相続者として始祖・新羅三郎義光(八幡太郎義家の弟)の流れを汲む佐竹氏の支配地だった水戸に封ぜられたが官位も無く二十一歳で病死したためあまり知られていない』

ついでに触れておくと、秋山氏の祖も新羅三郎義光である。また、二代將軍・徳川家光の異母弟で徳川時代屈指の名君と称される保科正之(会津藩主始祖)を養育したのは信吉の養祖母にあたる見性院(穴山梅雪夫人、信玄の娘)とされている。將軍・秀忠の正室(小督 おこう、織田信長の姪)が年上で強い女性だったので公然と側室が置けず、重臣が見性院に頼んで匿って貰ったと言われる。(成人後、家光に対面、幕政に貢献)そのため、会津藩には將軍のため、徳川家のためという独特の忠誠心があり、これが幕末における会津藩の悲劇、強いては新撰組の悲劇に影響した。(打田昇三)

ふるさと自慢

兼平ちえこ

このところ、古代の世が後押ししているかのように、常陸国の繁栄を伺いに石岡を訪れる人達が多くなっている様に思います。

歴史の学習を始める六年生達が、風土記の丘舟塚山古墳で喜々としてたわむれる様子をみる

とき、ガイドの醍醐味を頂いています。

四月のある土曜日、駅前観光案内所でのことでした。二十歳前後のカップルが、風土記の丘への道順を尋ねにきました。丁度、当番も終了間際で、風土記の丘への用事もあったことから、同乗をお誘いしました。彼の方は、どうやら石岡出身。彼女は東京からの人でした。

ここで、私のふるさと自慢を發揮して、奈良時代の石岡の繁栄を話しながら、国分尼寺、鹿の子遺跡あたりを紹介しながら走る。

彼が言うことには、「にじがはら」とは耳にしていたけれど、「尼寺の跡」とは知らなかったとの事。せめて素的な彼女に、ふるさとの歴史をご案内し、自慢してほしいと、三人で談笑したのでした。

そして、六月二十八日、市内のある高校の先生方の熱心な史跡めぐりに、少しだけお手伝いさせて頂き、充分なご案内ではありませんでしたが、ふるさと自慢の私としては嬉しい限りでした。これを機に、未来ある高校生の皆さんにも、是非是非もう一度、郷土石岡の歴史を学んで頂いて、郷土の誇りと、慈しみの心を育てたいと思えました。

x x x  
「見どころ案内」

西暦七四一年、聖武天皇の詔により、建立された国分僧寺は、当時としては七重の塔からみて、常陸国が大国であったことを物語っているとされている。

JR線を跨ぐ「いずみばし」より、筑波山を



## 「ふるさと風」の会会員募集のお知らせ

ふるさと風の会では、ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考える仲間を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化を真面目に表現し、ふるさと自慢をしたいと考える方々の、入会をお待ちしております。会の集まりは、月初に会報作りを兼ねた懇親会と月一回の勉強会です。会費は、会報作成費他として月額2000円と勉強会費（講師料）として月額1000円が必要となります。

入会に関するお問い合わせは、下記会員まで。

白井 啓治 0299-24-

2063

打田 昇三 0299-22-

4400

〒100-0001 東京都千代田区千代田

背景に望むと、現在のNTTの大きな鉄塔あたりに、その七重の塔の勇姿を見せていたとされ、人々の心のよりどころとなっていたといわれているそうです。「いずみばし」には、案内板もあり一度ゆつくり立ちどまって、常陸国の隆盛に浸ってみては如何でしょうか。

太古より

変わらぬ

まなざし

ふりそそぎ

男女（みな）の山

（ちえこ）

葉津と耳とホーイ

近藤治平

「風に吹かれながら一行の文を呟いて散歩するのにも悪くはないが、たまには長めの物語を書こうか」

膝の上に乗っかって一緒になってパソコンのモニターを見入っている愛犬の葉津にそう言つて、石岡に来て初めて書き下ろした物語が、「皇帝ペンギンの首飾り」であった。

「葉津」三歳になるメスのパグ犬である。

生まれつき丈夫な子ではなかった事もあって、大騒ぎして駆け回るよりも、膝に抱かれてジツとしていることが好きな子であった。その所為か、私が机に向かいパソコンを起動すると、何処にいても飛んできて、一緒に仕事でもするかのように、膝に乗りかかりモニターを見入るのであった。私の方も、葉津がモニターに打ち出される文章を読んでいくような気持ちになり、打ち込んだ文章について、ついつい話しかけてしまふのだった。

私に話しかけられると、ファフ、ファフと鼻息交じりの声を上げるものだから、私の方も時々葉津は文章も話も理解できると思い込まされ、依頼された雑文の数行を書いては声に出して読み聞かせることをするのだった。

そんな日常にふと気付き、それならば葉津と一緒に物語を作ってみようという気分になり、書き下ろしたのが「皇帝ペンギンの首飾り」であった。

こんな調子で二人で物語を書くのも楽しいな

と、次に何を書こうかと思案をめぐらしている中、葉津は天寿を迎え、膝の上から去って行ってしまった。

石岡に越してきて、ようやくに終の楽しみを見つけたと喜んだ矢先のことだったので、そのショックはかなり大きなものであった。

葉津の亡くなる数日前のことであるが、葉津を膝に抱いて、パソコンのモニターを眺めながら「葉津ちゃん、折角石岡に住んでいるのだから、石岡周辺の風景や伝説などをモチーフに物語を書いてみようか」と話したのであった。葉津は鼻息交じりの声にならない声で「ファフ、ファフ」と歓びというか励ましのエール(?)をくれたのだったが、彼女が膝にいらなくなってしまうと、物語しながら話す相手もなく、中断してしまつた。

葉津が亡くなって一ヶ月ほどした夜のことであった。玄関先にミュー、ミューという細かい猫の鳴き声が聞こえた。気になって玄関を開けてみると、やせ細った白い猫がこちらを見あげるようにして居た。野良猫の感じではなく、明らかに何処かの飼い猫のようであった。

どちらかというところあまり猫の好きなほうではない私であったが、青い目が似合いすぎる白い毛並みと可憐な姿に思わず手を差し伸べると、警戒心を示さず、抱かれてきたのであった。腹を空かせている様子なので、葉津に与えていた野菜系の餌を与えたところ夢中になって食べるのであった。

腹が満腹すると、膝に抱かれ警戒心もなく寝

息を立てるのであった。しばらく膝の中に眠っていたが、家に於くわけにも行かず、起きたのを機に外へ連れ出し、家に帰れと言ってやった。すると猫は、庭の隅にとことこ駆け足していった。家に戻るのかなとおもって様子を見てみると、庭の隅に小用を済ますとこちらに欠け戻ってきて、足元にすり寄るのであった。

「家に帰りな」

そう言つて尻を押して離すと、家に入り玄関の戸を閉めた。しかし、玄関の戸を閉めた途端、またミューミューと呼ぶのであった。

普段なら、そのままにしておくのであるが、何故か気になりまた玄関の戸をあけてしまった。それでどうとう我家に住み着くことになってしまったのであった。飼い主を探してみたのだが分からなかった。家に一緒に暮らす以上名前がないと困るので、綺麗なピンクの耳から、「耳」と名付ける事にした。「ミニ」ではなく「耳」である。

耳と一緒に暮らし始めたことで、葉津と一緒に書くことと書いていた、石岡周辺の風景をモチーフにした話を書いてみることにした。その切っ掛けというのも、耳も葉津と同じく、私が机に向つと膝に来て寝るのを日課にしてしまったからであった。

石岡物語として最初に描いたのが、舟塚山古墳と葉津をイメージした「霞ヶ浦の紅い鯨」であった。いわゆる石岡物語の第一作である。

折角石岡物語を書くのであれば、龍神山を書かないわけには行かないだろうと思つていたと

## ことば座・俳優養成所9月開設のお知らせ

あなたの隠れた才能をことば座に発見しませんか  
語り朗読劇でふるさと自慢を...

ことば座では、ふるさとの物語を朗読劇に表現する俳優を養成する、俳優塾を九月に開設する予定であります。年齢制限はありませんが、第二の人生を「ふるさと語り劇」の俳優としてチャレンジしてみたいとお考えの、団塊の世代の方大歓迎です。

ことば座俳優塾は、語り朗読劇のほか、手話の演技を加えた朗読劇俳優の育成を考えております。また、小林幸枝と一緒に朗読舞を演じる俳優の育成もあわせて考えております。手話演技を基軸とした朗読舞は、このふるさと石岡に生まれた、石岡にしかない舞台表現です。ふるさと物語を朗読舞で全国に発信して行きませんか。聴覚障害者の方大歓迎です。入塾には簡単な表現力試験があります。なことば座俳優養成所では、若干名の演出・文芸部員の育成も考えております。詳しくは、下記ことば座事務局の白井啓治までご連絡ください。

### 「ことば座風の塾」

ことば座では、6月より第二、第四土曜日、府中公民館小会議室にて「朗読舞」「朗読」「文章」の各教室が開講します。各教室10名程度の受講生を募集しています。入塾は定員まで随時受け付けております。受講料は、各教室月額3000円。お問い合わせは、下記ことば座事務局まで。

ことば座 〒315-0013 茨城県石岡市府中5

1 35

0299 24 2063 fax 0299 23

～

きであった。耳が突然私の膝に抱かれて子供を産んだのであった。最初の子は逆子で死産となつてしまつたが、第二子は無事に生まれた。男の子だったので「ボーイ」と名付けることにした。この耳ちゃんの出産によって石岡物語の第二作目となる「新説柏原池物語」が誕生したのである。

龍神山の龍が若い娘に化身して柏原池に降りてきて、若い男の命を奪つという伝説話を基に

書き起こしたものであるが、若い娘に化身して柏原池にくるのは、龍ではなく、佐志能神社の守り猫である、と新説した物語である。過去と未来の前編後編として、葉津の名前と耳ちゃんとボーイも登場させている。私的には比較的良好出来た物語だろうと思つている。

その後、府中城鈴が池に伝わる鈴姫物語を基にした「新鈴が池物語」、小川町の潮宮神社と潮の道を題材とした「潮の道余話」、石岡金丸通り

にある鈴の宮稻荷神社を題材にした「金丸わはは通り」、八郷町に残されてある奴賀比古、奴賀比売の伝説を基にした「奴賀比売物語」などを書き起こした。

昨年の春のことである。俳優志望の小林幸枝さんと、朗読舞&劇に絞った劇団を立ち上げる相談がまとまった。十月に朗読舞劇団「ことば座」を設立し、ギター文化館を拠点として常世の国の恋物語百の朗読舞に挑戦する事となった。

小林幸枝さんの舞技を意識して書き始めた物語には、舟塚山古墳をモチーフにした「古里は春の夢」、恋瀬川をモチーフにした「恋瀬川物語」、ギター文化館の喫茶室から眺めた風景をモチーフにした「窓辺に独り語り」、峰寺山の西光院から眺めた風景をモチーフにした「風貴」などがある。今は、菖蒲沢の薬師古道としてとんでもない新道を作ってしまったことに腹を立てて、薬師堂の下にある小さな弁天池を題材にして恨みの怪談話を書いているところである。

葉津、耳、ボーイのペット達に後押しされてふるさと物語を書き始めたのであったが、打田昇三さんではないが、ふるさとに物語の種は尽きぬほどある。ことば座・小林幸枝さんのために百の恋物語を書きましようという約束はしたものの、物語の種は尽きぬと体力の尽きぬことを願うばかりである。

この「ふるさと風の会」と同様に朗読舞劇団「ことば座」も確かな応援者を着実に増やしてきている。大変な終の楽しみを与えて貰えたと、人の出会いの妙に感謝している。

私の詩が戯曲になった  
小林幸枝

五月の会報に「夜空の星に」という詩を発表させてもらいました。そうしたら近藤さんが、それを朗読舞の台本に脚色しましようと言われ、ビックリしました。

題名は「漆黒と雑木林と星たち」となっていた。近藤さんは、ギター文化館のある柴間の雑木林をイメージして、揺れ動く女の恋心を表現してみたといわれた。

台本を渡されて、早速手話に表してみた。揺れ動く女の恋心、と言われたので女の告白劇かなと思って、舞い演技を作ってみたら、私の書いた詩の部分以外は男性の告白劇だと言われた。ええッ、と思って読み返したけれど、演技のイメージが浮かばなくなってしまった。

近藤さんは、単純な物語ほど表現は難しいよといわれた。そして、この本を綺麗に演じられたら本物だな、とも言われた。もう私はパニックです。

構成のスタイルは、一見、私が星空に向って告白を思いながら、雑木林に出かけていくというものですが、漆黒の雑木林を抜けて満天の星空の見えるところへ彷徨い行くのは男性だということです。何故だ？

私が私の心を誰かに精一杯に打ち明け、告白したいと思って雑木林を抜けて行くのに、それは私ではない、私という男性なのだということです。

更に近藤さんはこうも言った。「夢と現だな」と。話が難しすぎる。でも、近藤さんはそれしか言いませんでした。本当に困ってしまつ。考えようとしても、イメージを作ろうとしても雲を掴むような感じで、まるで私の書いた詩のようにハッキリしないのです。

稽古が終わると近藤さんは、昨日より綺麗だったよ、と言いました。こんな稽古は初めてです。昨日より綺麗だったよと言われても、そんなのかな、と一層不安になってきます。

ある日、こんなことを言われました。「幸枝さん、言葉に心を込めるんじゃないよ。心が言葉を紡ぐんだよ。始めに言葉があるんじゃないよ。心があって言葉があるんだよ」と。

翌日の稽古でこう言われました。「幸枝さんの詩には言葉としては、星に向って叫ぶ内容は書かれていないけど、この詩を書くとき幸枝さんの心の中には、叫び、告白する言葉があったんだよ。文字の言葉に書かなかっただけだよ。舞の演技には文章には書かれていない、幸枝さんの告白の叫びの言葉を表現しなくては」と言われました。

稽古で近藤さんは怒ったりしたことはありません。綺麗だったよ、としか言いません。でも、話すことがだんだん難しく、意地悪になってくるようです。毎回、新しい作品を始めるたびに、近藤さんは、私を包んでいる既成の殻、羞恥の殻などをドンドン壊し、剥いていつてしまいます。私がそれはないと困ると思ってる殻もひん剥いて捨ててしまうのです。一枚捨てられる

たびに、痛みを感じてしまします。

今頃になって、俳優という表現者になるって  
いうことの恐ろしさというか、怖さというか、  
立っていることも出来ないほどの恐怖感のよう  
なものを感じます。

それでも、近藤さんは「うん、今日は綺麗だ  
ったよ」と同じ言葉を言ってくれます。本当に  
綺麗だったのか不安に襲われます。

でも、「綺麗だったよ」という言葉を信じて、  
自分でもそう言い聞かせ必死に頑張っています。  
私は世界一綺麗と思うしありません。近藤さ  
んにそのように話したら、「女優さんは誰だっ  
てそう思っている。それでなければ舞台になん  
て立えない」といつてくれました。

もう、やけくそになって、「私は世界一綺麗  
だ！」って心に叫んでいます。

日々の風に吹いて

伊東ヨ子

- ・栗の若木 ゆくら ゆくら
- ・うるしの赤い枝 緑葉の色濃く
- ・どつなるでもないが たたおもう
- ・元気になったと花のいつ
- ・緑の中に佛をみる
- ・ホームにいても昔の風はなし
- ・この町の青春はどこに
- ・木立の中の赤い家を風がいく
- ・町で今年もほほえんでくれた花
- ・あみもって急ぎ足の子

・緑濃く里山は動かず

風に吹かれて

白井啓治

ふるさとの暮らしを楽しみ、ふるさとを自慢  
しようと思いい思いの言葉を書き綴っているこの  
「ふるさと風」への応援を思いがけないところ  
から頂き、継続することの大切さを改めて知ら  
されるこの頃である。

六月二十四日、ことば座の小林幸枝さんと石  
岡中町のカフェ・キーボーのライブステージに  
十ヶ月振りに立った。急な決定で充分な稽古が  
出来なかつたが、独特の表現力には益々磨きか  
かかってきている。指導する私が言うのも妙だ  
が、将来が楽しみみな女優さんである。

相変わらず少ない観客ではあつたが、朗読舞  
を始めて体験される方が数名来られ、小林さん  
の独特の舞い表現に驚かされたようだ。石岡に  
生まれた朗読舞というものの広報が足りないの  
のお叱りも頂いた。

ことば座の活動は二月にスタートしたばかり  
であるが、お叱りの通り広報の不足は否めない。  
そこで改めて朗読舞について紹介してみたいと  
思う。

朗読舞は、日本の古典芸能である人形浄瑠璃  
にヒントを貰い、朗読を手話を基軸とした舞に  
表現するという舞台表現である。小林さんは、  
常陽新聞にも紹介されたように、茨城県では唯  
一人のプロの俳優である。

彼女に初めて逢つた時、彼女の話す手話に独  
特の流れるような動作があり、驚きを覚えたの

であつた。それで、朗読に簡単に手話演技をつ  
けて表現してみようと思つていた考えを捨て、  
彼女ならではの朗読に載せた舞い表現を作つて  
みようと思つた朗読舞というスタイルを創案したの  
であつた。

イメージの中だけでの朗読舞であつたが、実  
際に彼女に舞を舞わせてみて、これまで何の経  
験もなかつた彼女にこれ程の舞い表現が出来る  
のかと驚かされたのであつた。特に、彼女の恋  
歌の舞いをイメージする力には、ただただ才能  
だと思つしかなかった。

一年半、彼女に「しゅわーど」という市民劇  
団で指導してきたのであつたが、これから先は  
市民劇団では無理だと、朗読舞劇団「ことば座」  
を立ち上げ、仕事として独立させたのであつた。

この二月からは、ギター文化館を拠点に、常  
世の国の恋物語百に挑戦している。ギター文化  
館では、年五回の公演であるが、すこしずつ表  
現の場を増やしていこうと考えている。

八月二十五日、頑固職人を自認する須田帆布  
の須田さんの所有する玉造手賀の「我家我家」  
で、「真夏の夜の朗読舞」のライブ公演を行なう  
ことが先日決まつた。鹿島鉄道が消滅してしま  
つたが文化のレールを新たに敷いてみたいと思  
っている。是非、お運びを。

編集事務局

〒315 0001

石岡市石岡13979 2

0299 24 2063

(白井啓治方)